

共古日録

五十

東京
郵便局
郵便部

大觀
如電

特別
45
1413
52止





共古日錄
十五



門 5
號 1413
卷 52

鳥居の起り
及大黒文の
説

共古日録五拾

鳥居の起り、乾土の古墳の入口か或は
の左の柱より出て、城を築き、古墳の
と記し、遺蹟を文學博士の著する
事、鳥居の梵語ト云ふ事、
の義、我り、サシテ、其の我、鳥居に
見す、難しとせず、を以て、二個の直
柱の二、三個の右柱を、横に、
鳥居を、名、古言、或は、佛、
建、築、日、初、来、セ、ル、子、
回、意、を、特、記、セ、ル、事、
コ、ノ、用、を、と、こ、ら、大、鳥、居、小、鳥、居、共、に、七、五、三、繩、を、以、て



早稲田大学
25.10.24
購 券

之を解つ或は我邦の田舎に於ては其の如くは
一の繩の如くは清濁と名取との別を爲す男の糸とこりり
又繩の如くは清濁と名取との別を爲す男の糸とこりり
繩を解つ或は我邦の田舎に於ては其の如くは
大黒天に祀りては其の如くは我邦の田舎に於ては其の如くは
前記の如くは我邦の田舎に於ては其の如くは
其身其女性を以て之をカリーリと云ふ是れ時を認す
而其性強忍一手剣を指し一子人頭を提げ一子天を指
し一子は心を持す蓬髪亂れて地をたれ弱體を懸すと
之を以て我邦の大黒天の像と其相物しからざる
又亦嘗て之を疑つる余が見るところを以てすれば大黒
天とは此の如くはシヤムハラハラのことをなすしかる程度か

の物物館には二三じやらハラの像を収む是れ彼國の
非に非ずして佛教富者の味なり其像元とクルキル
也方より得たるものと稱す其形甚だ我邦に所謂
大黒天なるものに似たり肥胖矮小の神蓮臺に右圖
の如くをもち腰を其の上に掛く而してたすには帯
を挿し同籍衣を着大塚より頭をかく此小像のものに
は發る智眼ありて思ふに其身岸の優小なるを
以て之を見れば是れマーリア人種神にあらざるや斷せ
り是れ其教書鏡の神にして其業を捕らふものは人に
穀物の滿ちを成す所以農は元と是れマーリア人
種にあらず身體矮小にして其色赤黒大黒の像は此
に非ざる農人の持るを歌はるるものにあらずと云ふ

大宮の支配

大宮の支配は、頂上中央より吉田口へ今日迄
大宮の支配は、頂上中央より吉田口へ今日迄
吉田の支配は、吉田口以下の新田を支配す
富士山は、妻火日妻葉の山なり。大宮の火日妻葉の山
佛を安んずる所なり。大宮の山なり。大宮の山なり。

大宮の支配

大宮の支配

大宮の支配

大宮の支配は、頂上中央より吉田口へ今日迄
大宮の支配は、頂上中央より吉田口へ今日迄
吉田の支配は、吉田口以下の新田を支配す
富士山は、妻火日妻葉の山なり。大宮の火日妻葉の山
佛を安んずる所なり。大宮の山なり。大宮の山なり。

王子の記を
記す一
筆

坂東人のことを記せし古の書は元文年間
に坂倉
急る東門と云ふ人「五ノ隨筆」と題して
考らるゝと云へ

山下野宮
聖
の塔

山下野宮聖に三重塔あり長者余未
支那の塔
を安せり此塔の地は平也なる塔
の四隅に常の塔あり
山あり塔より四方の四方の塔あり
生い茂りたる所の四方の塔あり
上なる塔あり四方の塔あり
塔の地を平也と云ふ中
塔あり古塔あり
所より塔あり此塔の地は平也と云ふ
塔あり古塔あり
塔の地は古塔あり

宗因此塔
三味に
めり

宗因が廿一歳のめり寛永十二年に

此の塔を西へ
築かむと云ふは
此の塔の三味
西行上人

此の塔は此の塔を二つとして
興にありたるは是れ此の塔

成田
中
の
塔

成田雷神の塔寛永十二年二月建られ
八年後燒
け其の塔を
建けしは
又仲見世は
言ふに

下總國高野寺
地蔵の古鐘

此鐘出井高野寺下総の寺に
地蔵の古鐘

と銘なれり此の古鐘の古鐘
下総の寺に地蔵の古鐘
と云ふ



大鐘及
名

先年大坂の天王寺にて大鐘を鑄造せしが其鐘
を記し鐘堂に懸けし鐘の尺度
高サ一丈六尺
指渡九尺
重サ二百六十斤
目方四萬五千斤
高サ一丈六尺
指渡九尺
重サ二百六十斤
目方四萬五千斤

これを此の大鐘と比較すに

智恩院の鐘は 高サ一丈六尺 指渡九尺
重サ九寸五分 目方二万斤
京大仏の鐘 高サ一丈四尺 指渡九尺
重サ九寸 目方一万二千斤
茶室大仏の鐘 高サ一丈七尺 指渡九尺
重サ八寸三分 目方

と云ふ大鐘の鐘は聖徳太子の寺にありしと傳説
にはありこれの鐘は其寺にありしと傳説に
鑄て六時堂に懸しと云ふ京大仏の鐘は鑄し
て其寺の子孫傳へ加婚路にありしと
鐘の古鐘にありしと云ふ

古鏡記

其等為家鄉の河せらるる鏡大峰或は初稿の古鏡
の鏡のちれば一層興あることなり前には三井寺の寺後の
古鏡と云ふをいふことありては鏡に記ありては
也國の記の明和元年以多らりて下野國那賀郡野見
野村長光寺邊の山にありて古鏡九百九十五
重中雲母然然文持たりと見ゆ高七寸三重中に
觀字長一寸なりと鏡を記出する
桃源雜記に正徳二年久慈郡増井村正宗寺より
二百三十四重七百文又百二十四文の古鏡を記出す
一語一言に天明五年十月十三日武義橋只郡園村
善正寺坊主親之介に三百重古鏡あり
市井雜談集に吉田豊川村に古鏡ありと記す

鶏鳴東

延喜二五年四月三日の田原長村神明社より
唐鏡二十九重四百文と記あり
此の也と云ふの也なりと云ふ也
鳥が鳴くありては唐鏡遠襲新入の也
此の也と云ふの也なりと云ふ也
鶏が鳴くありては東と云ふ也
有北都山上有大樹名桃都枝相去事三千里上
有天鶏日初出照其樹鶏鳴天下鶏皆鳴之也
此の也と云ふの也なりと云ふ也
一説妻が支の海に舟の舟を呼び起すに鶏が鳴る事あり

四谷王
社
銘
形
堀

武蔵國分寺
中院
西院
北院
東院

武蔵國分寺
中院
西院
北院
東院

武蔵國分寺
中院
西院
北院
東院

今川
今川
今川

今川
今川
今川

別當寶藏院第廿一世法印永澤代

別當寶藏院第廿一世法印永澤代

武藏國多摩郡四谷總鎮守

牛頭天王神西社寶前銅燈壹對

享保十三年九月所建顯經年月而破裂今茲連中
再煇建之從文心十三年丙午冬天保元年庚寅全毛
令鑄工製造以備而社前云爾

天保元年正月此銅鏡の破損を三年四月より修理せられたる

山葵搗りの形を特

安永六年の序文ありだ巻と題せし一口出

この見付前で大根堂が何れをなした大根はここら
中へ散って折れ見付から何れ大根堂より出たものと
二棒交が出て一通れと二に交らぬと云ふこと
たゞ三て大根のいふ粉+みちんに成つた足輕は皆山
葵のうらしと着て右た

山葵搗りあり山葵のうらしと着て右た
足輕のうらしと着て右た
山葵搗りにあつたものなり
△なんがそれをさしたる足輕の存
綿が一般なものを思ふ中の一草蒲葺の
こゝろか草をさしたるなりけ後皮羽織を
火かり

又東端の縁上へこの家の縁を捲く箱みねを端平のよりの
の如くしりし薪をけりてはに蒸を用る由未詳ならずと
あり或る漢筆談に對中無解一素人家收得一乾蟹
王人^後在^後有^後誰者供去懸^後の^後遂^後差不^後識^後亦^後不

識也

琉球はてし牛馬の類を舟にりて夜更を過ぐ
東海道の邊の家のこやがうとて大魚の類を舟にりて
鞋の類を土袋のついに釣し置くを漁人といふ
人のつらそとて舟にりて舟の類を舟にりて舟にりて
祭礼に舟にりて舟の類を舟にりて舟にりて舟にりて
舟にりて舟の類を舟にりて舟にりて舟にりて舟にりて
舟にりて舟の類を舟にりて舟にりて舟にりて舟にりて

大正
實永
五年
三月

大正五年三月三日
大正五年三月三日
大正五年三月三日

實永五年三月三日

女馬

女馬の類を舟にりて舟の類を舟にりて舟にりて舟にりて
舟にりて舟の類を舟にりて舟にりて舟にりて舟にりて
舟にりて舟の類を舟にりて舟にりて舟にりて舟にりて
舟にりて舟の類を舟にりて舟にりて舟にりて舟にりて

大正五年三月三日

大正五年三月三日
大正五年三月三日
大正五年三月三日
大正五年三月三日
大正五年三月三日

江戸府大蓮根
の名産也

三河の
榎の木

文徳の
の徳六

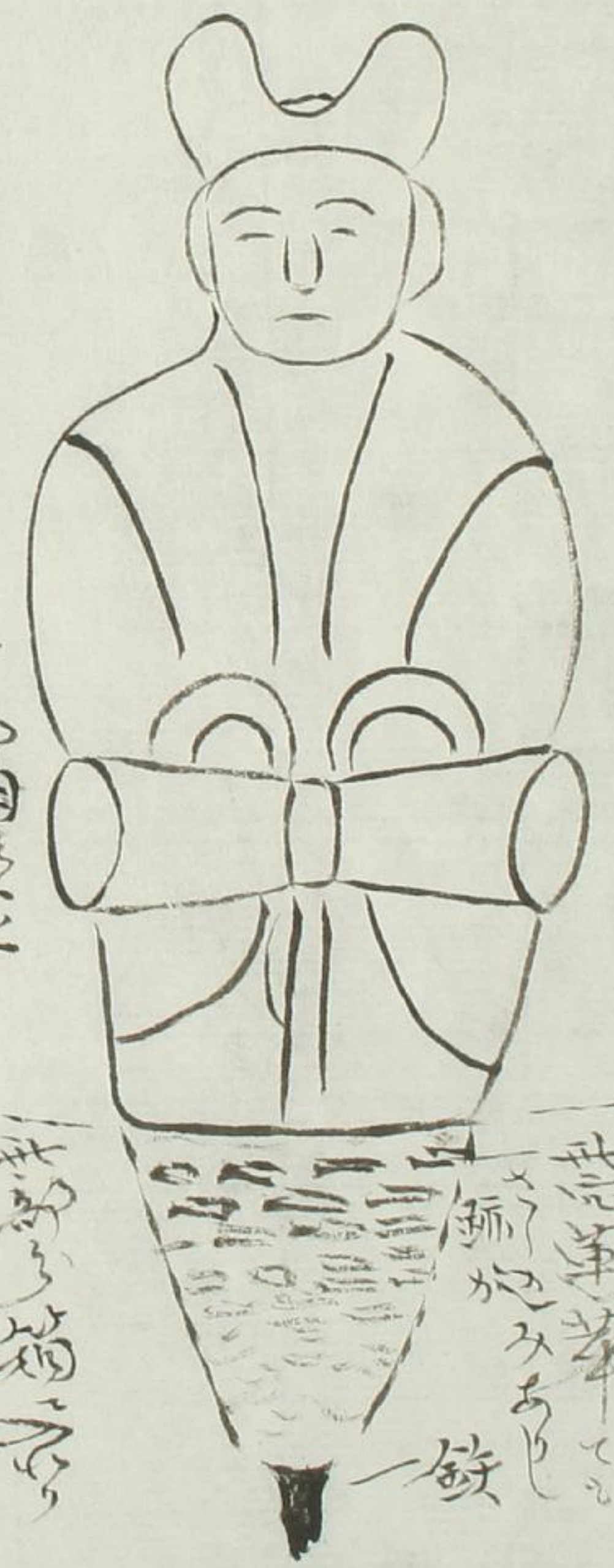
蓮根の名産也といふは本妙寺の村に於て
の也なり其地の蓮根肉は元来其味は中
料理茶屋にて用やるといふ松年の同
この河原に於て其の木の葉の数を
大なるものありと本日此の祖先の墓
の年強ありと本日此の祖先の墓あり
行かれ榎の木の葉の数を
文徳の徳六の徳六の徳六の徳六
君の徳六の徳六の徳六の徳六

當の徳六の徳六の徳六の徳六
純の徳六の徳六の徳六の徳六
徳六の徳六の徳六の徳六の徳六
徳六の徳六の徳六の徳六の徳六
徳六の徳六の徳六の徳六の徳六

ピクニック

ピクニックは自然の楽園なり
徳六の徳六の徳六の徳六の徳六
徳六の徳六の徳六の徳六の徳六
徳六の徳六の徳六の徳六の徳六
徳六の徳六の徳六の徳六の徳六
徳六の徳六の徳六の徳六の徳六
徳六の徳六の徳六の徳六の徳六
徳六の徳六の徳六の徳六の徳六

いどむすを丁度お見の如くして
いしは年一及昔を傳家の日
浅草傳法院茂摩多羅神木像



今部胡粉塗

神像
飾り
鏡

此木像大正二年白目女
おる中にある一尊也

摩多羅神は又古来の
空華の神に引られて是
神の身に和風の好交を
右手にてこれおするも
神數を授けし形にこれ
此神のありし慈眼を今
人々の心にあつては
宮に在りし神に明和の
神女はもとより七人の
神女はもとより七人の
心誠妙貞
美し
其一

刀劍の勝
敵を打つ
世の
世の
世の

一の下の甲...
二の下の甲...
三の下の甲...
四の下の甲...
五の下の甲...
六の下の甲...
七の下の甲...
八の下の甲...
九の下の甲...
十の下の甲...
十一の下の甲...
十二の下の甲...
十三の下の甲...
十四の下の甲...
十五の下の甲...
十六の下の甲...
十七の下の甲...
十八の下の甲...
十九の下の甲...
二十の下の甲...
二十一の下の甲...
二十二の下の甲...
二十三の下の甲...
二十四の下の甲...
二十五の下の甲...
二十六の下の甲...
二十七の下の甲...
二十八の下の甲...
二十九の下の甲...
三十の下の甲...
三十一の下の甲...
三十二の下の甲...
三十三の下の甲...
三十四の下の甲...
三十五の下の甲...
三十六の下の甲...
三十七の下の甲...
三十八の下の甲...
三十九の下の甲...
四十の下の甲...
四十一の下の甲...
四十二の下の甲...
四十三の下の甲...
四十四の下の甲...
四十五の下の甲...
四十六の下の甲...
四十七の下の甲...
四十八の下の甲...
四十九の下の甲...
五十の下の甲...

蚊に...
火に...
初...
二...
三...
四...
五...
六...
七...
八...
九...
十...
十一...
十二...
十三...
十四...
十五...
十六...
十七...
十八...
十九...
二十...
二十一...
二十二...
二十三...
二十四...
二十五...
二十六...
二十七...
二十八...
二十九...
三十...
三十一...
三十二...
三十三...
三十四...
三十五...
三十六...
三十七...
三十八...
三十九...
四十...
四十一...
四十二...
四十三...
四十四...
四十五...
四十六...
四十七...
四十八...
四十九...
五十...
五十一...
五十二...
五十三...
五十四...
五十五...
五十六...
五十七...
五十八...
五十九...
六十...
六十一...
六十二...
六十三...
六十四...
六十五...
六十六...
六十七...
六十八...
六十九...
七十...
七十一...
七十二...
七十三...
七十四...
七十五...
七十六...
七十七...
七十八...
七十九...
八十...
八十一...
八十二...
八十三...
八十四...
八十五...
八十六...
八十七...
八十八...
八十九...
九十...
九十一...
九十二...
九十三...
九十四...
九十五...
九十六...
九十七...
九十八...
九十九...
一百...

久松義典の遺言
「吾人の死後、我々の遺言を讀んで、
我が故郷の発展に努めよ」と

久松義典の遺言
「吾人の死後、我々の遺言を讀んで、
我が故郷の発展に努めよ」と

猫の眼に
泣き顔の涙

はるか昔、ある村に
一軒の酒家がありました。その酒家の
中に、
酒家のおばあさんが、
十二の孫を、
先年、
まじかに、
とりかへばやし、
みよあけあたし、
そらいらはえと、
ほらおねをぬね

万朝報
文
久松義典の遺言

深川仲西
 蜀山婦婿
 狂歌
 不孝前
 中野の君
 是れ下白を

花の如く...
 子七...
 皇年...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

ヌーデー

内前
 軍用之要
 以馬為先
 矣

軍大八の
 草

類聚東國史...
 先矣又弘に始に巨勢親臣...
 用莫先馬矣と前漢急...
 此地州莫如馬人用莫如...
 馬の用は前記の如く...
 ...
 ...
 ...
 ...

左例 羽州 秋田 五十七日 村産 四車 大八 行歳 三十八 五平
 同 國 施 王 一

國朝文獻通考

卷一百一十五

禮儀典

禮部

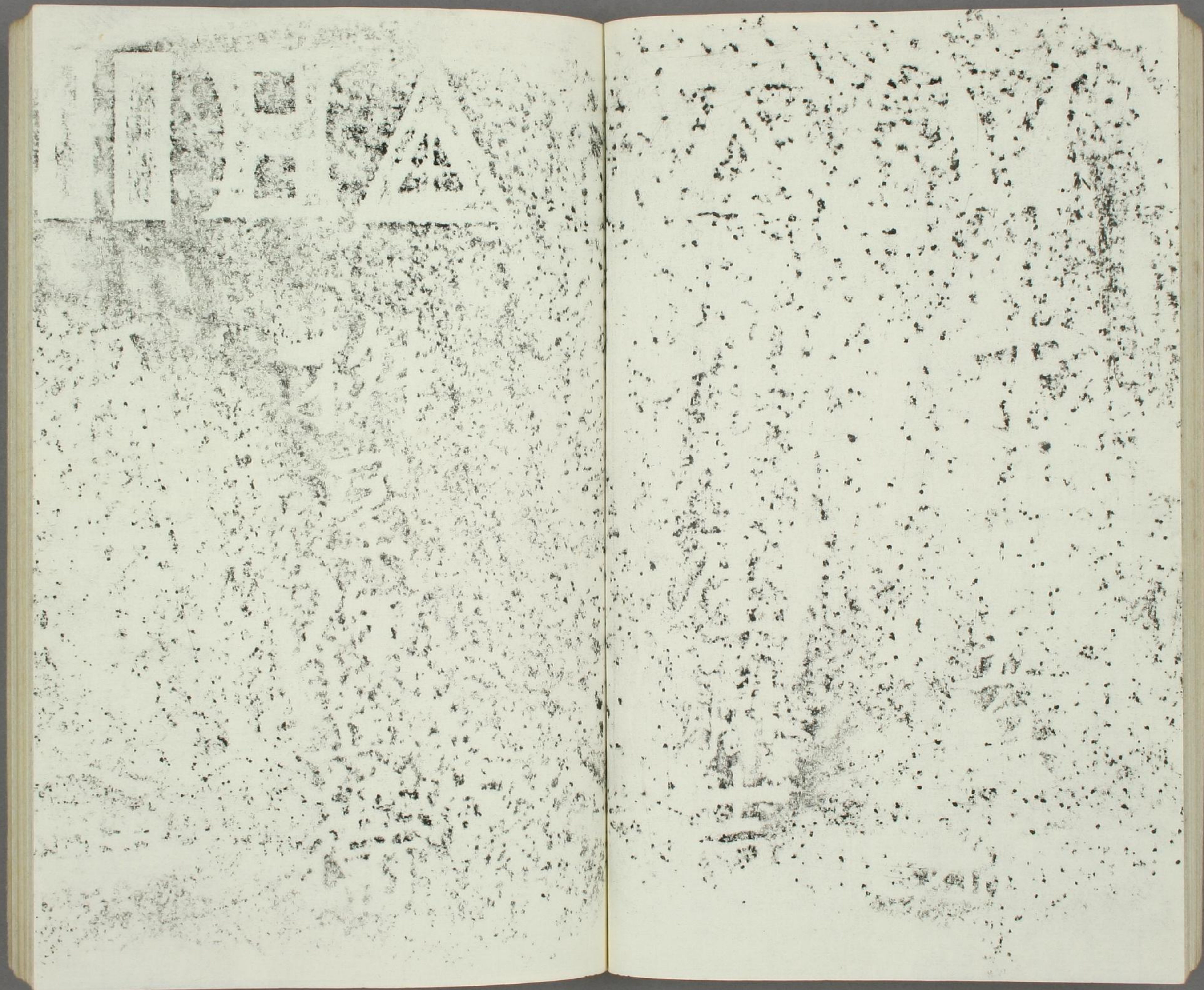
禮部

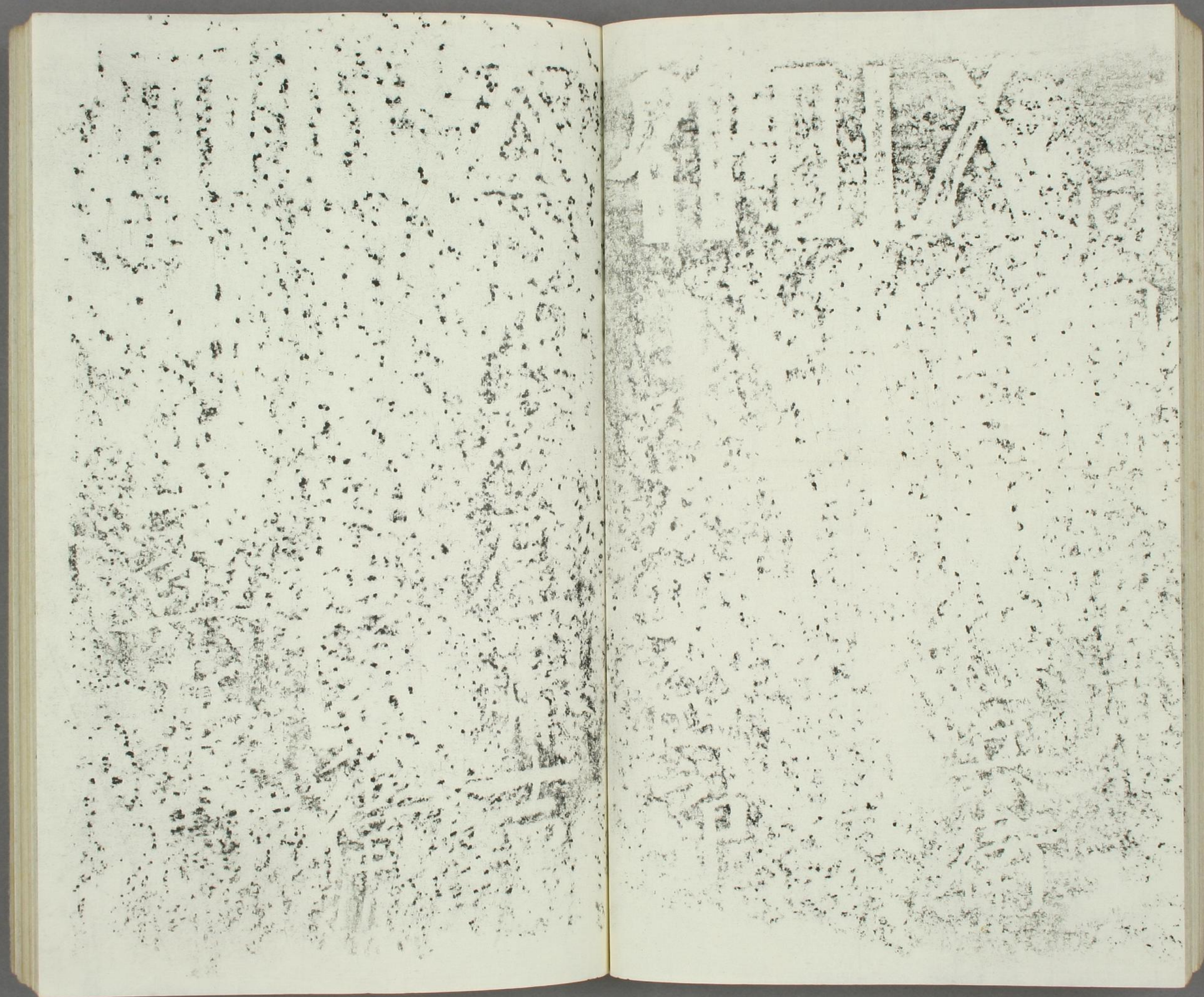
禮部

禮部

禮部







Handwritten text in vertical columns, likely a list or index. The characters are somewhat faded and difficult to read, but appear to be in a traditional East Asian script. The text is arranged in several columns, with some characters appearing to be larger or more prominent than others. The overall appearance is that of a historical document or a manuscript page.

Handwritten text in vertical columns, continuing from the left page. The characters are dense and somewhat obscured by ink splatters or fading. The text is arranged in several columns, with some characters appearing to be larger or more prominent than others. The overall appearance is that of a historical document or a manuscript page.

日本書紀
 卷之七
 皇極經世一
 天皇二十九年



皇極經世一
 天皇二十九年

皇極經世一
 天皇二十九年
 皇極經世一
 天皇二十九年

皇極經世一

皇極經世一
 天皇二十九年

自然の
 植物

本朝の古語志に於ては
 皇極經世一
 天皇二十九年

火所家の
の飲量

火所家の飲量その始りては... 後れを記
よ比して十年霜刃女北子屋中... 執行せし其
際二使用せる火杯
美し者無量一年火杯
甘み火所家の會津の旅人河内道七杯二合を飲り
山梨の佐兵衛といふ人七杯を飲り
其合を三杯をたりし
若初米國へ移りて
其初元年正月に
理議し... 始りて... 下女とて... 御の御とて

初米國
海を航

理議
の

庄屋の内儀のもみくらふ袖村の百世の...
靴は物にすむる木にとりて...
いた様をなせ物つな...
又洲の... 清の...
君これにて始り近は如の...
支那語を...
驚ニ一ヤの馬 イイ、ウカ

支那語
を

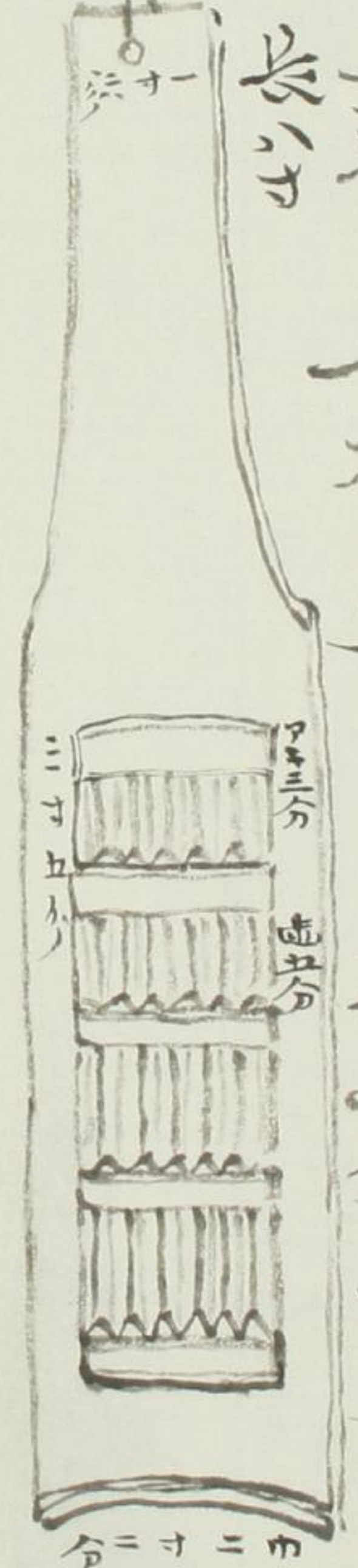
七人様

今此の... 七人様に...
... 織女の...
... 伊豆...

とありわらふをよし 天潢と天に安河とよみ織女を棚
織女とよめをいふはつかきまゝの愛したるもの
なまな牛に以てて男けらるる後ふ天稚彦
とこれふしや
古語始末に令天棚織姫神織神衣
古事記傳に棚織姫織女を云ふ
萬葉集に棚織津女と云ふ
機を織る神をいふ棚織姫と云ふ
玉手向十三原の七夕歌
たなをいふは織女をいふにのこりてあり
とよめは織女をいふにのこりてあり
たなをいふは織女をいふにのこりてあり

子瓜之網以為得と云ふ事文藝聚に京師七月
七夕婦女を望月以小蜘蛛を合子中次り有之若網
圓正謂好巧と云ふ
若網樓邊草に七夕の七夕の詩歌甚多書志鞠
と云ふ事文藝聚に七夕の七夕の詩歌甚多書志鞠
公のちもひのよりの日記に七夕の七夕の詩歌甚多書志鞠
歌七調子の管絃七部の舞七部
わづのまゝ七歳のの所なりと云ふ
七夕の七の因て七の数の遊びありと云ふ
初身より七夕の数の遊びありと云ふ
いと雄竹二本を高く懸くと結いあはせしと云ふ
のを懸短冊と云ふ各角七夕の歌の川七夕様なり

前に書きたる網の白電をて使用せしむるは山菱擦
 のこもをさく之にたして思ふに鋼板の目を立て擦る
 を力増ねたてぬえかたをて現行の改心の上人の使用せし
 「灯を二重にして其の光の強さを進歩せしむるは
 さうし用ひしもの者益の少く進歩せしむるは
 鋸板の三角形のおりおきと増し
 鋸板の三角形のおりおきと増し
 大根を擦すのたし蕨蒲皮のたし
 思ふはさく「たし」の用ひと増し
 改心
 竹を割る



長界人の長短はこれとち異なりは江場一父の従ふ
 愛國心の強さを

個人に對する體格は比較的高く
 個人に對する體格は比較的高く

手先指先の力は事には常用である

一の思ひきや上死に巧みである
 社会の利益を重んじた上家の運命を多んたり
 する困難道徳心は乏しいこと

弱者を愛し憐れむ親念の欠けて居る事
 必人に依頼する念の強きこと

のたし「事」に終始する耐久的精神の乏しいこと
 必人に依頼する念の強きこと
 必人に依頼する念の強きこと

長同

多田義一の宛
團體の世界無比なるを
愛國の心より國家的觀念が強い
祖先を尊ぶ家名を重んず
牧牲的精神に富む
大義名を尊ぶ心
弱者を同情し義徳を重んず
清濁を潔白とせしむ
潔白にして清濁を好む
如何なる外来物をも日本化する
孔教に對する愛情が深い
子供に對する愛情が深い

短

草木を愛し自然を尊ぶ
美術心に富み滋味を好む
心徳心は乏しい
偏狭にして感情に乏しく易い
猜疑嫉妬の念が強く協同一致の精神が乏しい
軌道易く冷め易い
規律秩序に對する根本觀念が乏しい
自治の精神に乏しく依頼心が強い
貴任觀念に乏しい
立憲政治に對する理解が乏しい
政黨輿論の弊が烈しい
他人の名譽を尊重しない

眼光の怒深る遠火の計畫をよそへん

異人種に對する同情心が是

の如く愛護の精神が是

の秤を以て計らぬがもれぬ人の見地別其人の心珠

の如くこのまゝであらぬと長を有するは神

は其者の形を以てするが是を以て是を継ぐ

何んの如くそのまゝであらぬと長を有するは神

の如くそのまゝであらぬと長を有するは神

の如くそのまゝであらぬと長を有するは神

の如くそのまゝであらぬと長を有するは神

の如くそのまゝであらぬと長を有するは神

二十六夜

この如くそのまゝであらぬと長を有するは神

の如くそのまゝであらぬと長を有するは神

の如くそのまゝであらぬと長を有するは神

の如くそのまゝであらぬと長を有するは神

の如くそのまゝであらぬと長を有するは神

の如くそのまゝであらぬと長を有するは神

の如くそのまゝであらぬと長を有するは神

の如くそのまゝであらぬと長を有するは神

の如くそのまゝであらぬと長を有するは神

の如くそのまゝであらぬと長を有するは神

の如くそのまゝであらぬと長を有するは神

りて火場の中に居す火場は波が寄成りしりしりかた
十八日清りて月を新し女三子と名を新し童子
数えを新し親言が所敬寶冠戴り地勝多
わ親を頂戴父母母との二年の所立茶を如器の
年があらは日先月先みなる所然つあすかたを新し
女三子を指ししと交向所成りしりしり
のこころをあらし
十の神と書し月如石の所波の言はりしり
つりし中先世しをあら親言供養塔を
白多摩即之里村中康三年の月日行供養夜
研女三子如器ありしり如器書しり
供養塔の板研

蓋本上の奥の門のありしり如器の所波の言はりしり
の儀方におきをしりしり時由中より親言あをを
にを新しんとを右の所波の言はりしり
中如器の所波の言はりしり
の日のあらは月のおのめわを月をすりしり
先りしり如器の所波の言はりしり
身を今せしりしりしりしりしりしりしり
千の年五月のありしりしりしりしりしり
とすしりしりしりしりしりしりしりしり
とをいぬんしりしりしりしりしりしりしり
多川の所波の言はりしりしりしりしりしり
九の如器の所波の言はりしりしりしりしり

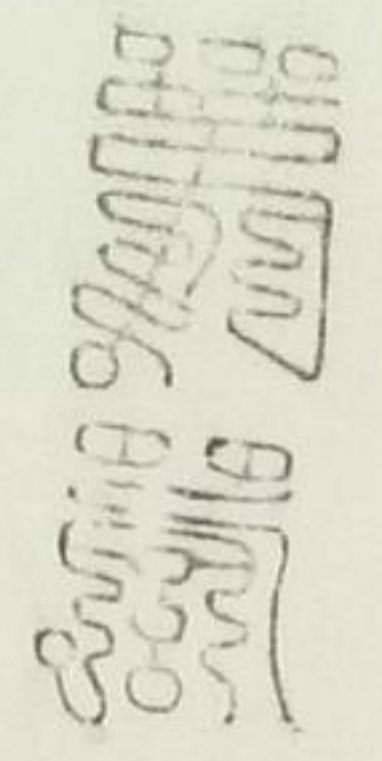
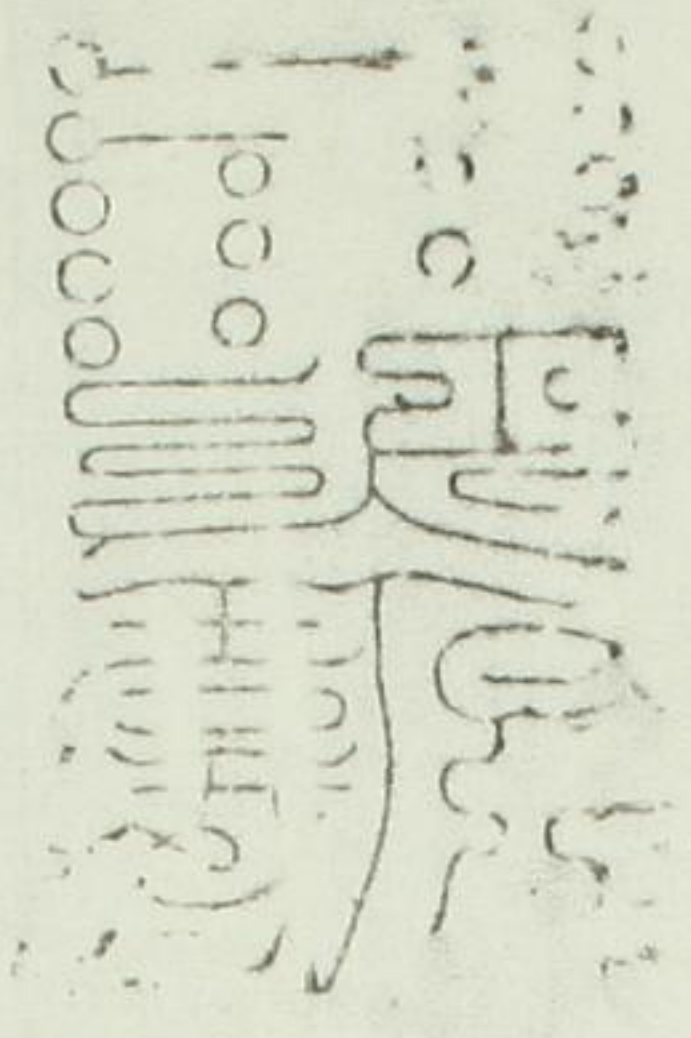
一、其ともはの如く其れを...
 二、其れは...
 三、其れは...

次来也...
 馬の...
 馬の...

重...
 神...
 常...
 不...

重...
 神...

重...
 神...



重...

前...
 天...
 天...

皇
二十三年

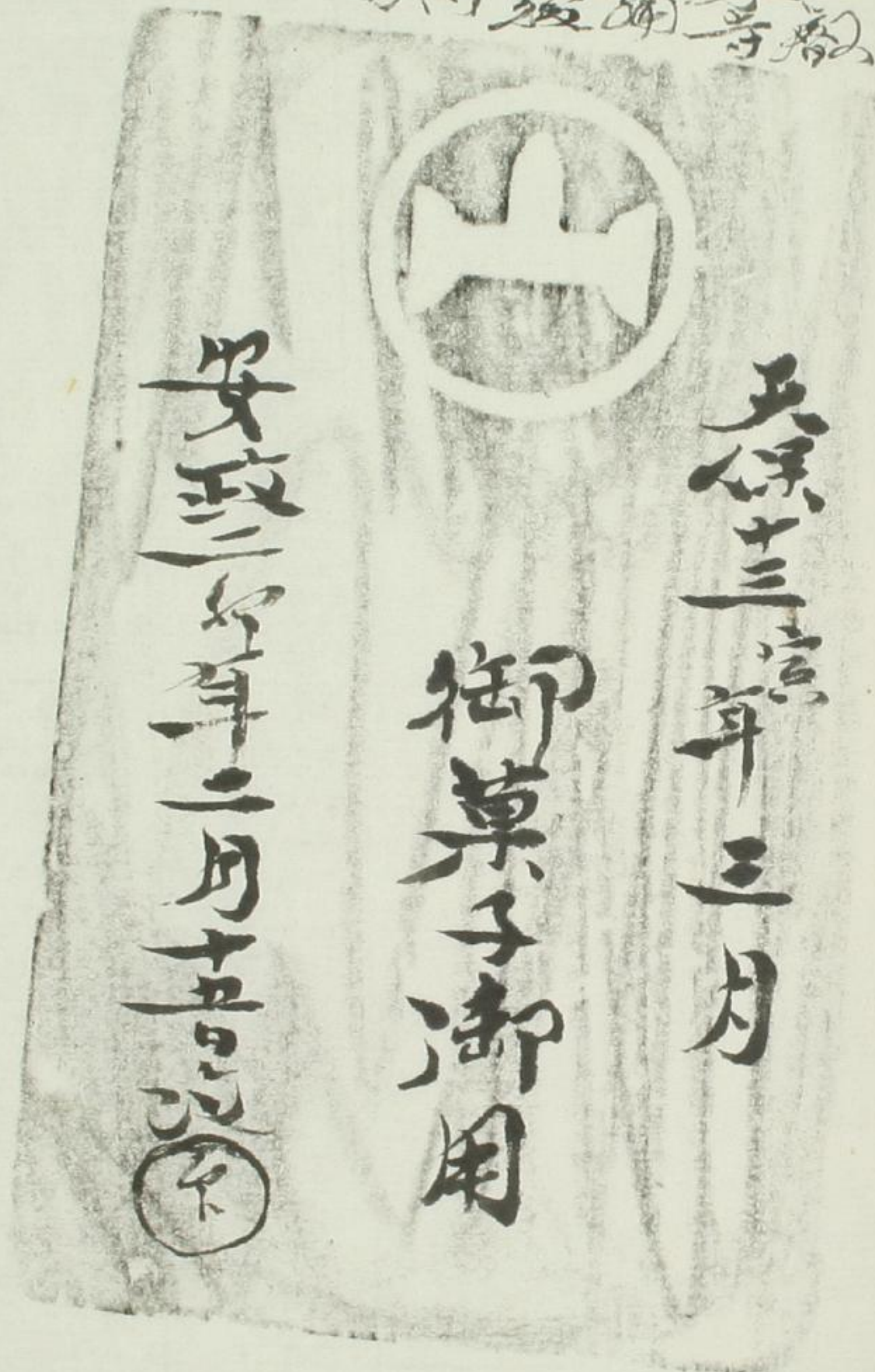
意容延月并娘輝印
廿三日のころ前々よりお尋に方成候事二首あり
露印重

深川
との別

御形... 若くは... 別為... 為重... 凡は... 此すに... 種... 田舎...
御形... 若くは... 別為... 為重... 凡は... 此すに... 種... 田舎...
御形... 若くは... 別為... 為重... 凡は... 此すに... 種... 田舎...

御菓子
御用の
丹後
形丸

御菓子
御用の
丹後
形丸



安政二年三月

御菓子御用

安政二年三月

東馬
金澤丹後

金以葉の店の葉子銘板木

葉子銘板木

小波子銘

大波子銘

葉子銘

葉子銘

葉子銘

實永寺

永永寺藏書

武成國書場

右此寺院と終言流建堂告安道葉師名儀

東殿山中未身其自今以後不可有怠惰也
天下安否祈禱佛事勤行不可有怠惰也

山門三院執行探題大僧正天海

河成道の古き店

河成道の古き店が國史史記の河成道の古き店

給成今に尋せ給ふ事帰とせしめて身持よしに女
持と右共五郎左共三郎おれはとてあ成道
と成せしはあ成りし一層の路より成の辨の道せし
をさる 女持身の子 固成業を成り

山崎氏とて由成
新成今とて由成
赤成今とて由成
白成今とて由成
黒成今とて由成
青成今とて由成
赤成今とて由成
白成今とて由成
黒成今とて由成
青成今とて由成
赤成今とて由成
白成今とて由成
黒成今とて由成
青成今とて由成

右例とて由成
左例とて由成
馬具等とて由成
通成今とて由成
赤成今とて由成
白成今とて由成
黒成今とて由成
青成今とて由成
赤成今とて由成
白成今とて由成
黒成今とて由成
青成今とて由成
赤成今とて由成
白成今とて由成
黒成今とて由成
青成今とて由成

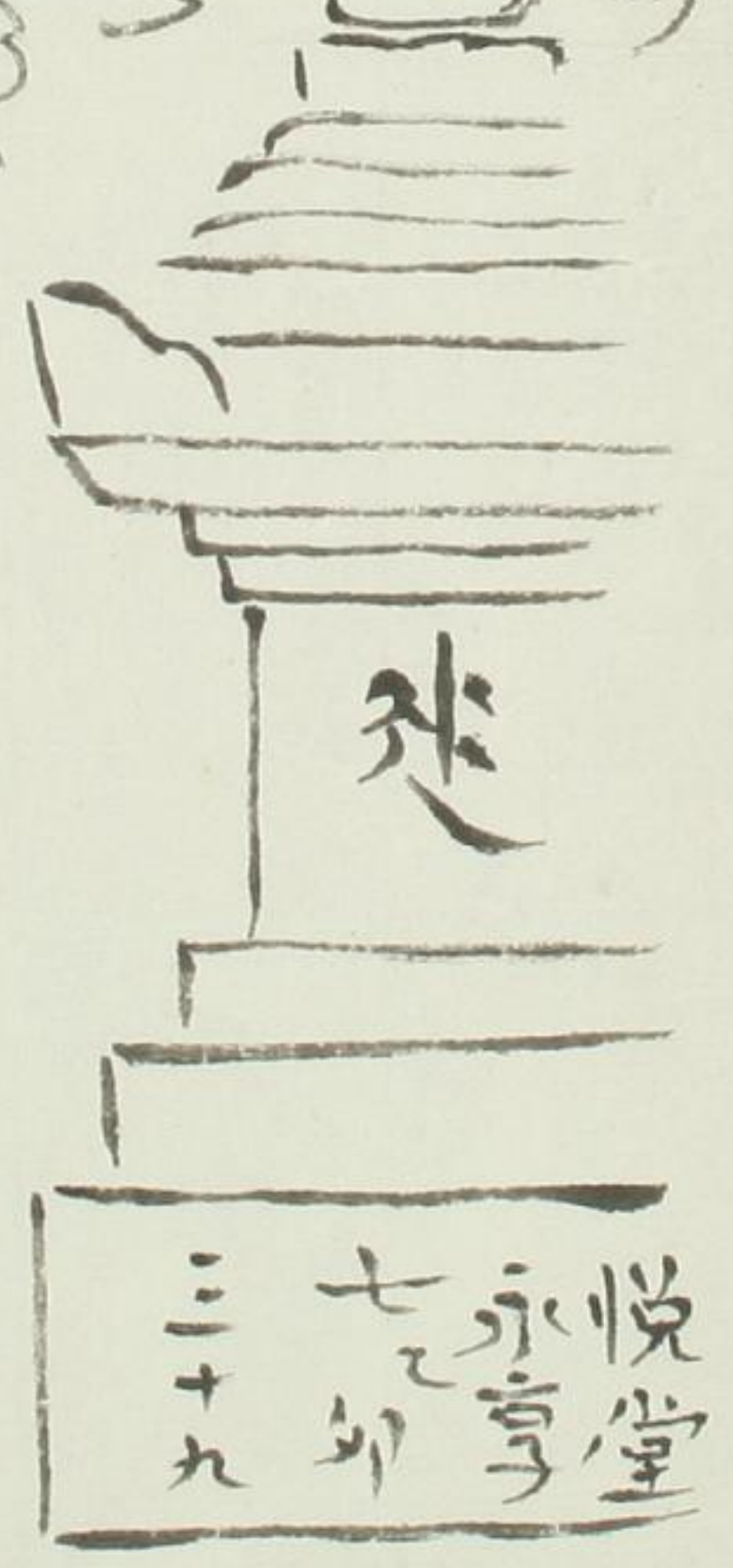
中川とて由成
郷親とて由成
後回等とて由成

大正の二階より増築し一層世間の名を馳せしめ
 各名をとり著る名物餅とすし名物湯豆腐と
 長崎の成るは物とすし名物湯豆腐と
 成道の名物とすし名物湯豆腐と
 伊豆の名物とすし名物湯豆腐と
 村の名物とすし名物湯豆腐と
 妙の名物とすし名物湯豆腐と
 年々名物とすし名物湯豆腐と
 に親中娘少監始揚雷の歌雷と湯豆腐
 の名物とすし名物湯豆腐と
 名物とすし名物湯豆腐と

永享の
 性
 永享の

徳治の
 永享の

本所色一ツありておぼし
 自性院の
 本堂の常の
 如くありて永享の
 常の
 以て正殿を
 かのことを
 大正二 文應三 正和二 嘉曆康永 元弘 承安 三建久 四
 大正二 文正七 康長九 嘉延 元和 四年



悦堂
 永享
 七
 三十九

要石

又要石の記述に「あをまお」
見ゆかち千子娘み山の集の石のみ
お座石とて度島の沖天海に
しなりとてゆるる留細粒長雪
北よりすゑの敷すゑとて大森
影を以て以て巻物を減せし
みこれをもて一日録に記し
赤木村下十八女村と書し早
書し鷹無村と書し此れあり
名字にこゝなびあるとては
笠戸ノゾキド 天生月ヤバトメ
讀ませるのあはれし人とも
東海村 津井 河内
入月のハシと

鷹無村
赤木村
笠戸ノゾキド

文久年向
サタタコス

一版のよき書を奉りて又その
文久年向の北所奉行黒川
慶應年向の北所奉行黒川
クリスマスの及サタタコス
こはす(露)セイントニコラス
鷹のむねをたし「慶長」
あはれをたし「伊勢」
あはれをたし「大森」
あはれをたし「大森」

鷹の出に
あはれ種

五車亭の歌

りて大心の意に... 五車亭は法華宗の... 五車亭の歌... 五車亭は法華宗の... 五車亭の歌... 五車亭は法華宗の... 五車亭の歌...

文化年間の
ゆりの記

文化二年春の... 文化二年春の... 文化二年春の... 文化二年春の... 文化二年春の... 文化二年春の... 文化二年春の... 文化二年春の... 文化二年春の... 文化二年春の...

الحمد لله الذي جعل في كل شيء
دروسا لمن يتفكر في خلقه
ويعلم ان كل ما خلقه له حكمة
وكل ما خلقه له غاية
وكل ما خلقه له حكمة
وكل ما خلقه له غاية
وكل ما خلقه له حكمة
وكل ما خلقه له غاية

وكل ما خلقه له حكمة
وكل ما خلقه له غاية
وكل ما خلقه له حكمة
وكل ما خلقه له غاية
وكل ما خلقه له حكمة
وكل ما خلقه له غاية
وكل ما خلقه له حكمة
وكل ما خلقه له غاية

وكل ما خلقه له حكمة
وكل ما خلقه له غاية
وكل ما خلقه له حكمة
وكل ما خلقه له غاية
وكل ما خلقه له حكمة
وكل ما خلقه له غاية
وكل ما خلقه له حكمة
وكل ما خلقه له غاية

وكل ما خلقه له حكمة
وكل ما خلقه له غاية
وكل ما خلقه له حكمة
وكل ما خلقه له غاية
وكل ما خلقه له حكمة
وكل ما خلقه له غاية

春の日の光をい見らる
 下させしとていせし
 言詞をいひし見ゆ
 猫はやくしとていせし
 石衣ていせし
 七年のいせし見ゆ
 春の日の光をい見らる
 下させしとていせし
 言詞をいひし見ゆ
 猫はやくしとていせし
 石衣ていせし
 七年のいせし見ゆ

春の日の光をい見らる
 下させしとていせし
 言詞をいひし見ゆ
 猫はやくしとていせし
 石衣ていせし
 七年のいせし見ゆ
 春の日の光をい見らる
 下させしとていせし
 言詞をいひし見ゆ
 猫はやくしとていせし
 石衣ていせし
 七年のいせし見ゆ

四市	四谷市	神田市	神明市	浅草市
四墳	無縁寺	梅名墳	業平墳	道灌墳
三馬	千壽	板橋	品河	
三池	不忍池	姥ヶ池	鏡池	
三林	上野櫻	増上寺	松	筑紫梅
三森	王子	吾妻	鈴森	
三塘	高縄塘	日本塘	柳原塘	
四塔	上野	浅草	増上寺	岩中
三山	東叡山	持乳山	愛宕山	
三雪	筑波雪割	立山	雪割	尾山雪割

共古日録 廿七終 目九十五

昭和四年八月十日



共古日録 明治三十四年より始り大正十一年
 の月々多し冊数廿冊とありしは向日を經
 る二年二年余紙を多し三年枚はるる
 て乃此の海志録に又見前記なり其始
 り帳に記したるを多しせしむるを
 さぬは勿論のこも見前日録に多し今に
 してより多しを多しせしむるを多し
 七のいもあらぬ其後にならぬと藤貞幹
 は好古日録を著し二巻にて題を改め好古日録

とせられたりふり録せし巻にたりしおぼえを
改て一日箋とせんと思ひて同様のことを
い記し置くに題を改む必要ありとせられたり
を以て續編と其の改題

大正十二年八月

七十四

共古針



Handwritten characters in the top left corner, possibly a name or address.

Handwritten characters in the top right corner, possibly a name or address.



Vertical handwritten text on the left side of the envelope, including the characters '上海' (Shanghai).

Handwritten text in the center of the envelope, possibly a recipient's name or address.



Large vertical handwritten characters in the center-right area, including '上海' (Shanghai) and '孫' (Sun).

Small handwritten characters on the right side of the envelope.